

牛の健康を守る職人

牛削蹄師

父から息子へ

受け継がれる技術と思ひ

静まり返った牛舎。いつもは牛の鳴き声が響き渡っているのに、この日はどの牛もおとなしい。そんな中で、2人の削蹄師(牛の蹄を切る職人)が黙々と作業を続ける。一言もしゃべらず、ぴったりと息が合った様子で。昨年11月に行われた全国牛削蹄競技大会で、福島県から55年ぶり2人目となる総合優勝を果たした木幡地区に住む武藤稔貴さん(27)と、父であり親方の武藤靖雄さん(61)。

今月号では、あまり知られていない牛削蹄師の仕事を、農業の後継者不足が深刻化している中、父の後を継ぐ決断をした息子と、後継者を育てる父親の様子を交えて紹介します。

牛削蹄師とは

牛は2本の蹄(指)で何百キロもの体重を支える動物です。この蹄の形を整える作業のことを削蹄と呼び、それを仕事としているのが削蹄師です。

牛にとって、蹄は第2の心臓といわれており、歩くたびに蹄が伸縮することで、蹄の血液循環を促進するポンプの役割を果たしています。

月に6ミリ程度伸びる蹄は、人間の爪と同じで健康のバロメーターです。削蹄師が蹄の状態を見るだけで、その牛が数カ月前に病気になったことや、

餌をあまり食べなかった時期などがすぐに分かります。

削蹄により安定した立ち方や歩行を確保することにより、乳牛では乳の出る量が増加したり、肉牛では肥育効率の向上につながったりするなど、畜産農家にとっては無くてはならない存在です。

牛が嫌いだから父の仕事は継がない

武藤家では以前、80頭余りの牛を肥育していました。きょうだいの中で、子どもころから稔貴さんだけ牛が苦手な手で、触ったことが無かったといいま

す。その理由を稔貴さんに聞くと、「怖くて臭いから」だったそうです(笑)。

将来、牛に携わる仕事だけは絶対にしたくないと思っていた稔貴さん。高校在学中は野球漬けの毎日でした。卒業が目前に迫り自分の進路を考えた時、自分は何がやりたいのか全く分からなかったと振り返ります。飲食業に興味のあった稔貴さんは、取りあえず日本の南から北上しながら自分のやりたいことを探そうと思ひ、沖縄県石垣島のレストランのホールの仕事に就きました。

◀写真左が武藤稔貴さん、右が父・靖雄さん。武藤さん親子が牛に近づくと、牛は自ら歩み寄ってきた。牛が2人に慣れ親しんでいる様子分かる。稔貴さんは4人きょうだいの3番目で長男。父の後を継いで削蹄師になると稔貴さんが決めたとき、自分の代で廃業だと思っていた靖雄さんはびっくりした半面、やはりうれしかったと話す。



身近な職人は父だった

稔貴さんが石垣島でホテルの仕事をはじめから約2年半、厨房のシェフやホールで働くホテルマンたちのプロとしての仕事ぶりを見ているうち、いつしか『プロ(職人)』というものに憧れを抱くようになります。そんなときに頭に浮かんだのが、父の仕事である「削蹄師」という職人でした。それははしくも、子どものころ絶対になりたくないと思っていた職業でした。



牛を知るための厳しい修業の日々

削蹄師になることを決めた稔貴さんは、父の下で基本技術を学んだ後、日本一厳しいといわれる北海道の師匠の下で約2年間の修行を積みみます。

もともと牛を怖がっていたため、修行に出る前は、稔貴さんが近寄るだけで牛が騒ぎ、父からは「仕事の邪魔になるから下がって見ている」と怒鳴られていたそうです。牛は非常に神経質で憶病な動物のため、人間の気持が伝わってしまうのです。

削蹄技術は蹄を切るのみにあらず

基本的には一人で1頭の牛の削蹄をするこの仕事。800キロ近い体重の牛の脚を一人で持ち上げ作業するのは、常に危険と隣り合わせです。そこで大事になるのは、いかに牛をおとなしい状態のまま削蹄できるかです。削蹄をする際、牛への近づき方や牛のどこを触っているかといった微妙なコツもありますが、一番大事なのは削蹄師の感性(オーラのようなもの)。普通の人では手に負えない暴れている牛に、この感性をもった削蹄師が近づくと、一瞬にしておとなしくなることもあるそうです。父・靖雄さんいわく、昔は怖がっていたのはいたものの、息子・稔貴さんにはこの感性が備わっていると話します。

けがをさせない、しない

武藤さん親子に、この仕事で一番気を付けていることを聞くと、「牛にけがをさせないこと。そして自分たちもけがをしないこと。」だといいます。そのためには、常に目と耳を集中させて、牛にけがをさせないように削蹄をしながら、少しでも周りで異音がすれば、すぐに別の牛の削蹄をする人を助けに行けるようにしているそうです。取材に伺った時に牛舎が異様に静かだったのはそのせいだったのです。

牛削蹄競技大会の主な流れ

※ ①から⑥の順 ⇒



▲上は削蹄前と削蹄後の蹄。下は削蹄に使用する主な道具



①削蹄前に牛を歩かせ、牛の立ち方や歩き方などをチェック



②蹄の形や疾病などをチェックし、マークシートに記入



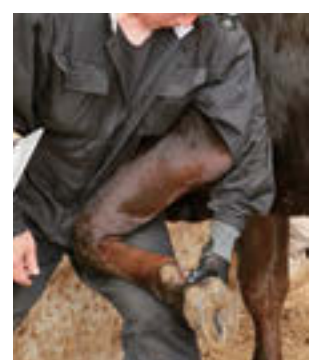
③蹄を接地させたまま、伸びた外周部分を専用のナタで切り落とす



⑥最後に蹄の外周にヤスリを掛けて完成。全国大会では1人で4本の蹄を40分以内に削蹄します



⑤専用の鎌で、蹄の裏側を削切



④削蹄で一番大事なのがこの「脚挙げ」。牛にストレスがかからないようにしないと、牛は脚を挙げてくれない



息子へ

俺一代で終わりだと思っていたが、お前が後を継いでくれたことで、俺も農家の方々も少しは安心できる。これからも日々勉強して、健全な牛を管理していつてくれ。

親父へ

今の自分があるのも、多くの方々の支えがあり、そして親父がいたから。本当に感謝しています。これからも、ご指導よろしくお願ひします。

牛削蹄の魅力

若い人に知ってもらいたい

「牛が何をしたいのかを考えながら、一頭一頭形が違う牛の本来の蹄形に削蹄すること。」

削蹄という仕事の魅力について、稔貴さんはこう話します。牛の蹄を切りながら、稔貴さんは常に心の中で牛に話し掛けています。

稔貴さんに今後の抱負を伺うと、「今回全国優勝できたが、そのことは意識せず、今までどおり精進していきたい。また酪農や畜産などには若い世代の人が少ないので、少しでも興味を持ってもらい、その中で削蹄師という仕事も考えてもらえればうれしい」と話していました。

仕事場では、あくまで親方

父と2人きりの職場。20代の青年にとつて、そこには恥ずかしさも少しはあるのではないかと、今回取材に伺う前は思っていました。しかし牛舎で目にしたのは親子ではなく、プロ同士の真剣なまなざしで作業をする親方と弟子の姿でした。

一人の人間として仕事場で接することができることは、普段何気ない会話をするときでも、お互い腹を割って話すことができるのだと、休憩中の会話から伺い知ることができました。



削蹄をする前、牛舎内を見渡しながらか、静かに牛の表情や蹄の様子をチェックする稔貴さん。牛たちはビクリともせず、そばで見ていると、稔貴さんと牛たちが心の声で会話しているように見える。▶



▲削蹄を依頼した酪農家の方（写真中央）と武藤さん親子の休憩中のひとコマ。靖雄さんとは30年来の付き合いで、靖雄さんの削蹄のおかげで、駄目だと思っていた病気の牛が回復した時のことを懐かしげに話していた。

家業を継ぐか迷う

自営業者にとって、自分の子どもに家業を継がせたいという思いは少なからずあるはず。しかしそれは強要できるものでもありません。靖雄さんも自分の代で削蹄師という仕事は終わりだと思っていました。息子の稔貴さんも、自分に子どもができても削蹄師をやらせたいとは思ってはいないようです。

しかし会社勤めのサラリーマンなどと違い、家業を営む親の姿というのは、常に働く姿を目にしているため、子どもにとっては一生忘れることができないものとなり、いざ自分の進路を決断する岐路に立ったとき、必ず家業の選択肢が脳裏をよぎるのではないのでしょうか。それは重圧にもなるものですが、いろいろな経験を積み、その重圧を跳ねのけられれば、稔貴さんのように、将来の選択肢を広げられる大きな財産になりうるのだと思います。

若者が夢を抱ける農業 若者の活躍がまちを元気にする

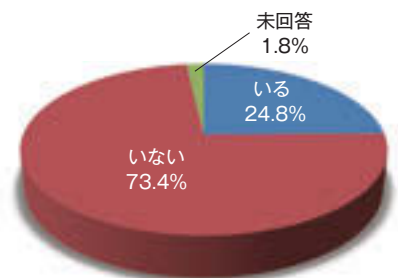
現在県内には、牛削蹄師が54人ほどいますが、そのうち20代は2人で30代は4人と、深刻な後継者不足になっています。

この問題は他の農業分野でも同じで、すぐに解決できるものではありません。しかし今回の稔貴さんの活躍のように、若者が地元で頑張る姿は、このまちに元気を与えてくれます。

「頑張れよ」

この一言を、稔貴さんは仕事で農家へ行くたびに掛けられるそうです。農業を営む誰もが後継者不足を認識しているからこそ、頑張っている若者に自然と声を掛けてしまうのだと思います。「若者が夢を抱ける農業」を育成できるよう、市も農家の方と一緒に考えていきます。

問：あなたの農業経営に後継者はいますか？



▲昨年9月、市内の全農家を対象に実施された「農業者アンケート」調査結果。稲作や畑作、畜産などの全ての農家が対象となるこのアンケートで、後継者がいると答えた方は全体の約4分の1に満たない。
※調査結果は市ウェブサイト等で公開します。